

善照寺
寺報

ぜんしゅうじ

創刊号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七) 二二三二
FAX 〇四七(三九七) 二二三二

あけましておめでとうございます

善照寺住職 今 岡 達 雄

慈光裡に平成十三年を終わり、平成十四年を迎えることが出来ました。本年も、実りの多い一年であることを祈念いたします。

昨年を振り返るとさまざまなお知らせがありましたが、最も大きな出来事は「心臓の病（狭心症）を得たこと」です。



昨年、正月四日年始参りの途中で胸痛におそれ救急車にて入院致しました。その後六月に血管拡張手術、十二月にカテーテル検査と年三度も入院することになってしまいました。

このため、米国で研究中の副住職を帰国させたり、種々の浄土宗の役職を辞任したりと周囲の方々にも多くの迷惑をおかけしてしまいました。

昨年十二月の検査結果では良い報告が二つ、悪い報告が一つございます。良い報告とは一月発作時の心筋のダメージが回復していること、六月の血管拡張

手術が良好であったことが確認できたことの二つです。悪い報告とは一番内側の動脈の動脈硬化が進行しており、いつ発作が起こるか分からないと言うことです。結局「要注意」ということで特に寒い季節は気を付けるようにと言われております。

そんな訳で本年は、新年の挨拶にも回れませんでした、今回、副住職夫妻の協力を得て善照寺寺報「ぜんしゅうじ」を創刊することに致しました。季刊で年四回の発行にしようとも考えていますが、滞り無く発行するには大変な努力が必要です。目標は定めずにはまず第一号をお届けしようということになりました。

昨年は初念仏会を行うことが出来ませんでした。大変申し訳なく思っております。本年は下記予定通りに滞り無く実施したいと考えております。

皆様方のご支援、本年も宜しくお願い申し上げます。 合掌

年間行事予定

平成十四年善照寺の年間行事の予定は次の通りです。皆様方は是非ともお参りいただければ幸いです。

初念仏会 一月十七日(木)

一時 法話 二時 法要

お彼岸春(三月十八〜廿四日)

お盆 東京(七月十三〜十五日)

地元(八月十三〜十五日)

施餓鬼会 八月十七日(土)

一時 法話 二時 法要

お彼岸秋(九月二十〜廿六日)

お十夜会 十一月十七日(日)

一時 法話 二時 法要

歳暮 十二月下旬

除夜の鐘 十二月三十一日

夜十一時三十分位から始めます

住職法話

愚者の自覚を

法然上人のお言葉に「はじめにわが身の程を信じ、のちには仏の願を信じる也。ただしのちの信を決定せんがために、はじめの信心をばあぐる也」とあります。

このお言葉は阿弥陀さまの信仰に入る心構えを述べたものです。まずはじめに自分自身の愚かさ、つたなさを自覚し、その上で、阿弥陀さまが私たちを救わんとなされた本願を信じるのです。それは、ご本願の力がはつきりと信じられるようになるために、我が身のいたらなさをしつかり省みるべき必要をあげているのです。」

つまり、信仰の第一歩は、おのれの愚かさに気付くということと、

ころにあります。その気付きさえ有れば、阿弥陀さまの救いはつきりと信じられるようになるとおっしゃっております。さて、皆様はいかがでしょうか。さて、私も自身のことを考えてみましょう。今の世の中は社会の発展という名の下に欲望を拡大させ、欲望の実現のために人と人を競い合わせます。楽しく感覚を刺激し、苦しさ痛さを避け、今の幸せが未来永劫に続いていくものと思い、他人よりも一歩先を進もうと競っています。そして、競い合いの勝者は自分の能力を誇り、そこに至らなかつた者たちを努力が足りない者として切り捨ててしまいます。しかし成功は永劫に続くものではなく、いつか大きな壁に出会って悲嘆にくれてしまいます。

勝利を得られなかつた者たちは、自分自身のこととはさておき、成功できなかつた理由を他人や社会に求めます。いわく、

教育が悪い、先生が悪い、会社が悪い、上司が悪い、正当な評価が行われていない、えこひいきがまかり通っている等々。そしていつのまにか、周囲をすべて壁に囲まれて身動きのとれない状況におちいってしまいます。

その様なとき。私たちは立ち止まってよく考えてみる必要があります。自分自身を過大に評価することも、自分ではなく周囲が悪いことにしたがるのも、自分自身で何かが出来るという期待のあらわれです。でも、一人の人間の力などちつぽけなもので、たつた一人では何もできません。多くの人々の力に支えられて、ようやくと日々を送っているのが真実の姿ではないでしょうか。愚かなことに、私たちはそのことに気付きません。

他人の不幸は他人のこと、自分だけが良くなればよい。なんと偏狭な考えでしょう。なんと愚かな考えでしょう。しかし、

多くの人々の本心はそこにあるのではないのでしょうか。それが人間です。それが私たちの姿です。そんな私たちでも阿弥陀さまはお救い下さいます。愚かな自分、救われ難い自身に気付いたとき、目の前には阿弥陀さまの本願が見えてくるのです。これこそが信仰の第一歩と教えて下さっています。

浄土宗は二十一世紀を迎えるに当たって、私たちが行うべき行動の規範となる宣言を創りました。

- ・ 愚者の自覚を
- ・ 家庭にみ仏の光を
- ・ 社会に慈しみを
- ・ 世界に共生を

の四つの言葉です。その第一が愚者の自覚であり、これこそ浄土宗の信仰の基本になっているのです。

南無阿弥陀仏・・・

(住職 達雄)



菩薩のご夫人

「救いを求める人すべてが
ただ私の名を呼ぶだけで
私の処に生まれぬ内は
私は皆とともに苦しもう」

(阿弥陀さまのお誓い)

亡くなったのは老年の男性の方で、ご夫人を残して逝かれました。最後の別れとなる火葬場で、窆に入っていくご主人に向かつてご夫人が言ったのを、私は聞きました。

「バイバイ、幸せだったよ」
私はなぜか涙が出てきました。「幸せ」という言葉にどうも弱いのです。

坊さんである私は涙をぐつとこらえ、最後の別れをすませたばかりのご夫人や息子さんを親族控え室へと先導しました。

その故人の片脚には医療用のボルトが埋め込まれているとのことでした。あの世での暮らし

を気になさって、息子さんが問われました。

「焼き上がってボルトが残っていたら、骨壺と一緒にしまった方がいいのでしょうか」

未熟な私は気の利いたことが何も言えませんでした。

あわてて本質的でないことばかり話してしまい、あの世では脚で歩くという事はな
いと思うと付け加えるのが精一杯でした。

しかしその方は最後の部分を聞くと晴れやかなお顔になり、
「それですつきりしました」

とおっしゃいました。無理もありません。身近な人を亡くされて、気遣いがその人へ行ってしまうのは。

「あなたが、あの世で脚が不便じゃないかと心配している。それと同じようにお父様も、いつもあなたのことを心配していま

仏さまからの手紙

すよ。早く阿弥陀さまのことに気づいてくれよ、ちゃんと極楽にやっ来てよと。あなたがするのはお父様を心配することじゃない。お父様と阿弥陀さまの心配に気づくことなのです。脚のボルトはそれに気づかせるために、南無阿弥陀仏を言わせるために置いていったのですよ」

とつさにそんなふうにするのは、なかなか難しいものです。喧騒の中、何時しか話題は変わっており、やがて収骨を告げる放送が聞こえてきました。

帰り道のバスで私はご夫人と隣になりました。私は、ご夫人が窆の前でこぼした一言に感動したことを言おうとしました。しかしご夫人の言葉を聞いたことを伝えただけで、感動したと口に出す前に、涙が出て言えなくなっていました。

ご夫人は言いました。「私は幸せでした。だからもう

悲しみません。これからはしっかりホトケを守っていきます」

私は口に出しては言いませんでしたが、ご夫人が無理をしているように感じました。

「それでも悲しいときは思いきり悲しんでください。阿弥陀さまと一緒に悲しんでくれますから。ご主人も阿弥陀さまのもとからそれを見ていますから。ひとりぼっちではないですから」

そう言いたかったのに、言う機会がありませんでした。

ご主人が南無阿弥陀仏となえていたかは知りませんが、極楽にいるということが妙に納得できました。

ご主人は、ご夫人を導く菩薩である。阿弥陀さまとともに、南無阿弥陀仏を言わせようとしている。そういう状況にあることが、手に取るようにわかったのです。

バスの大きな窓からは午後の陽射しが射しこんでいました。

(副住職 達彦)

事業報告

年中行事

善照寺の正月は檀家様への年始回りから始まります。正月四日地元、五日その他地区の年始回りのはずでしたが、四日の早朝住職が胸痛を訴え、救急車で順天堂浦安病院に入院しました。心筋梗塞で心臓の一部に働きの悪いところが残りました。このため、初念仏会も中止することになってしまいました。なお、入院前に卒塔婆供養の申し込みをされた方々につきましては、住職が退院後に供養を行いました。

施餓鬼会（八月十七日）は善照寺で最も大規模な法要で、出席者約百名でした。十夜会（十一月十七日）は八十人程度の出席をいただきました。

十夜法要の御説教は浄土宗から派遣された指定布教師の大野静雄上人でした。皆様の出足が

遅く、法話開始時は二十人程度でちよつと気をもみました。各法要とも午後一時から御説教がありますので、一時までにご参集下さい。

その他の事業

・副住職住居整備（六～十月）

住職の長男達彦は平成十二年七月に東京教区無量寺三浦住職の令嬢久美英さんと結婚後、八月から米国シンシナティ大学で研究しておりました。しかし、住職の体調悪化のため帰国し寺の手伝いをすることになりました。そのため副住職としての住居を建築いたしました。場所は水場の横です。

・鐘楼瓦修理（十月）

九月の台風で鐘楼の屋根瓦が一部欠損してしまいました。鐘楼全体が痛んできましたが、今回は瓦の修理だけを行いました。石積、北側柱などをはじめ全体的老朽化が進んでいます。

・会館再塗装（十一月）

会館は建築して十年になりました。一階扉、非常階段、一階入り口張り出し玄関の屋根など鉄板に塗装している部分の痛みが目立ち始めましたので再塗装しました。

・本堂内陣床修理（十二月）

本堂は大修理をしてから二十年になります。堂内床のひずみが目立つてきました。そこで内陣を板張りにしました。

・畳替え（十二月）

本堂庫裡書院の畳表を替えました。それぞれ約十年を経て色が変わり、一部すり切れているところも有りましたので、床の張り替えと共に畳替えを致しました。

ホームページ

善照寺のホームページが有ります。是非ご覧になって下さい。

<http://www.zenshoji.or.jp/>

編集後記

私が善照寺に住み四ヶ月が過ぎようとしています。新生活にもだいぶ慣れましたが、毎日新しいことの発見があり新鮮な毎日を感じています。寺務所に居りまして、まだまだ皆様のお顔とお名前が一致せず皆様方には大変ご迷惑をおかけしているとともに勉強不足を痛感しております。

このたびの寺報『ぜんしょうじ』創刊とともに私自身、仏法と善照寺について学ばせていただき、そしてさらに多くの方々にそれらをより知っていただきたいと思っております。

これからも皆様のご支援の程よろしくお願い申し上げます。本年も皆様にとつてよいお年でありますように。

合掌

（副住職室 久美英）